

達はすぐごと帰って行つたし、疎開の学童達も一ぺんにつまらなそうな顔で、各宿舍に帰って行つた。

あとから賛美歌でも歌つたのかと聞いたたら、学童達はただ首を横にふるばかり。遠藤牧師さんは、たびたび日曜学校の生徒を連れて慰問に来て下さつた。何度根岸刑事の怒声に止めさせられても。

何しろ卒業の時歌う螢の光も敵英国のメロデーだからと十七年三月からの卒業の各学校も禁止となり、外来語は一切駄目、レコードも円盤と言わせられた時代であり、キリスト教等への弾圧もひどかつたと思う。

遠藤牧師さんは私の実家と親交の深かつた御一家だけにどうしていられるかと案じていたが、信者の方々が食糧は密かに運んでいられると聞き安心した事を思い出す。

④特高とは、旧警察制度に於ける政治警察であり、特高警察とも略称され大逆事件（明治四十三年～四十四年 明治天皇暗殺計画という容疑で多数の社会主義者が逮捕処刑された事件）を機に明治三十九年首相西園寺公望の時警視庁に特別高等課（昭和七年部に昇格）が置かれ、昭和三年各県にも設置、内務省直轄下に治安維持法などに基つき、警察国家の主体として、自由主義、共産主義運動などを弾圧、昭和二十年廃止。（百科事典マイペディア参照）

遠藤牧師さんというと、昭和十六年晩秋の頃だつたらうか。暫く御無沙汰をしていたので御宅をお訪ねすると、牧師さんは袷の着物姿で南の縁側でぼつねんと南の空の方を見ていられた。その視線の先は、今盛んに銃声のしている神社の森にむけられていた。

伊佐須美神社では、何百年いやそのもつともつと以前からかもしれない昔からの境内の大木に巢をかけ雛を育てている鵜や五位鷺を立

木を枯らすからという理由で猟友会の人達に頼み銃で撃っている。鳥は日本海や太平洋まで飛び魚を捕つて来て雛に食べさせている。夜鳴きながら渡つていく鳥の声の懐かしさを布団の中で聞いていた幼い日を思い出す。今銃の音のする度に飛び立つ鳥、真つ逆さまに落ちる鳥の惨たらしさ。たまらなく心が痛む。「なあタカちゃん。大昔から住んでる鳥まで殺せと神様がおっしゃるのかなあ、果たしてもの言えぬ鳥までこんな事して戦に勝てるのか」ぼつんと言葉を切られた牧師さんの横顔がとても淋しそうだったのが忘れられない。

しかし遠藤牧師さんには、戦後に素晴らしい御活躍と明るい光が当たり、本当に良かったと心から嬉しく思っている。

おみな吾ら銃後を必死に守る為

辛きに耐えんと励ましあいき

太平洋戦争の始まつたあの頃からだつたらうか。町の住民にひどく恐れられていた根岸特高刑事の横暴について、長く町議であり三業組合長（旅館、割烹、飲食店）の義父の所に度たび町の人達や組合員から相談があつた。まさか警察に話す訳にもいかず、話した事がわかればかえつて後難が恐ろしいからと、皆泣寝入りの有様だったので義父は親しかつた警察署長に相談したら「自分も困っているが管轄が違ふので」と言われたので、署長の立場も考え誰にもこの事は言わず終戦になつてはじめて家族に話した。

昭和十八年十二月中旬、夫の出征の為生後二ヶ月に満たない娘を抱いて東京から婚家に帰つて来た私は、女中が二人共勤労働員で軍需工場に行つたことを知った。当時は全国の旧制中学生や女学生は勿論、